

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	鎌 田 首 治 朗
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
読むことの学習指導における単元設計に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	山 元 隆 春	
審査委員	教 授	吉 田 裕 久	
審査委員	教 授	田 中 宏 幸	
審査委員	准教授	間 瀬 茂 夫	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、読むことの原理的考察にもとづいて、国語科における読むことの学習指導の実践課題を明確にし、国語科における読むことの学習指導の単元設計・単元計画作成に貢献する単元計画作成モデルを構築・検証し、小学校を中心とした読むことの学習指導における実践課題の克服をはかった。</p> <p>本論文は序章・終章を含め、7章で構成されている。</p> <p>序章（研究の目的と方法）では、研究の目的と方法が述べられ、先行研究をふまえた上で本論文の位置が示されている。</p> <p>第1章「読むこととは何か」では、主としてヴォルフガング・イーザーが1970年代に提唱した読書行為論を詳細に検討して、読書行為の原理的考察を行った。主に、イーザーの名著『行為としての読書』で提唱された諸概念の検討と、わが国の文学理論研究や国語教育研究における受容のあり方をこまやかに跡づけながら、小学校国語科の読むことの学習指導の基礎理論として、イーザーの読書行為論とその日本における受容のあり方がどのような意義を持つのかについて詳細に検討した。</p> <p>第2章「自分を読むことを考えるために——2つの問題」では、前章における読書行為論の考察をうけて、自己意識に関する心理学の成果をふまえながら、読書主体の問題に関する考察を展開した。1980年代の国語教育研究で読者論の導入に際して議論された、読むことにおける主観と客観に関する議論を検討しながら、読むことにおける認識の問題を検討し、それを読書主体の主体性を検討する枠組みとして再構成した。</p> <p>第3章「「自分を読むこと」モデル——読むことの学習における単元設計に向けて」では、第1・2章で考察した読書行為や読書主体の問題をもとにして、本論文において中核となる「「自分を読むこと」モデル」を組み立て、記述した。従来提唱されてきた読むことへの教育の理論のうち、大河原忠蔵、熊谷孝、桑原武夫、外山滋比古、西郷竹彦、太田正夫らの、読者の主体性を対象とした論や、第1章で検討したヴォルフガング・イーザーの読書行為論の検討を行った上で、「テキスト」に自ら発見した「謎」を究明しながら、「テキスト」と対話し、自身の一貫した解釈を生み出しながら、自分自身との対話を繰り返す読者の読</p>			

書行為を「読むことモデル」として組み立て、記述した。この「読むこと」モデルが、本論文後半における、読むことの学習指導における単元設計を駆動する中核となっている。

第4章「目標分析と小学校・国語科読む能力目標分析試案の構築」では、ベンジャミン・ブルームの提唱に始まるタキソノミー（教育目標の分類学）に関する先行研究を渉猟し、田近洵一、井上尚美、梶田叡一らの目標分析論を検討した後、2000年以降に提唱された新しいタキソノミーの詳しい比較・考察がなされている。とりわけ、ブルームのタキソノミーと、それらのいくつかの改訂版の検討をふまえて、さらなる改良をおこなったマルザーノらのタキソノミーの綿密な比較・対照によって、本論文独自の目標分析試案作成への足場が築かれた。こうした基礎的な研究をもとに、本章の後半では、読むことの授業を構想し、実践するための「国語科読む能力目標分析試案」が提案されている。

第5章「読むことの学習における単元計画モデルの構築と国語科・読むことの単元設計の実践的提案」では、前章の考察をふまえて、実際の「単元計画モデル」を組み立てるための理論的な考察を行い、その上で国語科の「読むこと」領域での単元設計の実践的な提案がなされている。小学校の国語教科書教材としても用いられている「注文の多い料理店」（宮澤賢治）を教材とした読むことの学習指導の具体的な構想が、本論文の第1章から4章までの考察で得られた知見をもとにして展開され、「単元計画作成モデル」と単元計画作成チェックリストとが提案されている。さらに、そのチェックリストについての実証的な研究とその分析を行い、その有効性と課題を明らかにした。

終章（研究の総括）では、本論文で見いだした成果を総括するとともに、研究の展望を述べている。

本論文の意義は、次の4点に見いだされる。

(1) 読書行為の研究が自己観察を経て自己解明に至ることだとするヴォルフガング・イーザーの見解に大きな示唆を得て、「読むことの学習指導における単元設計の基礎となる「読むこととは何か」という問題に取り組み、読書行為論や読者論のこれまでの議論をふまえつつ、それらを詳細に考察・検討し、独自の「読むことモデル」を作成・提案した。

(2) 単元設計の基礎となる授業の目標分析に関する内外の理論に目を通し、代表的なタキソノミー論をつぶさに検討し、国語科における読むことの学習指導の単元設計の指針となるように解釈した。

(3) 教育現場における読むことの学習指導の実践課題に根ざした、教師の読むことの授業づくりを後押しする単元作成モデルと単元作成チェックリストを具体的に提案し、その有効性の検証を行った。

(4) 読むこととは何か、読む能力とは何かという問いとそのことについての考察を生かして、読むことの単元作成チェックリストを作り上げることによって、読むことの学習指導を推進するために必要な教師の力量を明らかにした。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成26年8月25日